

“パイオニアになる春 2010” カウンセラー日記

2010 年 3 月 21 日～4 月 4 日

ハロー英数学院

大谷 君枝



3 月 21 日(日) —— 壮行式

7 時 30 分、ハロー英数学院前。

小雨が降る肌寒い朝「壮行式」を行う。参加生徒は、中学 2 年の渡辺亮平君・菊池隆眞君・田辺和翔君。小学 6 年の藤田裕人君・小林自然君・清水一輝君・川下陸君は 3 日遅れて来ることになっている。小学 5 年の寺本五月さん・五十嵐茜さん。

カナダのホームステイに続いて 2 回目の渡辺亮平君にリーダーの委任状を渡す。家族の方々の見送りがうれしい。ことしは小学生 6 人、中学生 3 人の小さいグループとなった。

旅行 ——

1994 年～2005 年ニュージーランドのホームステイの空の手配は、JTB、日通、東急に頼んでいたが、今年初めて福井旅行にお願いした。「よかった！」と思うのは、所長の西村光代さんがすべてにおいてきめ細かくテキパキとしてくださること、関空までバスに同乗してくれたのは多いに助かった。日本の経済が大きく変化する中で、旅行社も消えていった。“安・近・短（アンキンタン）”を求める消費者、格安チケット、格安ツアーを売りさばくさまざまな旅行会社の中で、このホームステイは王道を貫いてきた。「生徒の命や安全は格安ルートにはのせられない。」おかげで過去に 1 つのトラブルった例も事故もなかった。今年もそうありたいと願う。

家族の見送り ——

定員 27 名の中型バス。見送る家族を待っててくれる。家族の人のバス代は不要と、今までになかった好条件。

「できたらご家族の方も関空までどうぞ！」とお誘いしたのは私。子供と同じ思い出を共有できるのもしばらくだけ、まもなく親から巣立っていく。それまでにどれだけ多くの心の共有があるか、それは後に何よりの財産になるものだ。子供たちが視界から消えるまでずっと見送って手を振って下さった姿は、中 2 の息子が初めてホームステイに出かける後姿にいつまでも手をふっていたありし日の私の姿と重なって胸がつまった。



N Z 98 便とN Z 303 便 ——

関空から南半球の島国ニュージーランドのオークランドまで 10 時間 55 分の空の旅。機内食 2 回、ジュース、アイスクリーム、水などのサービス、ペロリと平らげて生徒達はテレビやゲームに熱中している。

2005 年のホームステイまでは、関空からクライストチャーチへは夜の直行便があり便利だった。“目覚めれば、そこはもうクライストチャーチ”といううたい文句をつけていた私。このごろは諸事情のしわよせがどんどん乗客にくる時代になった。今回の N Z 303 便は、オークランドで国際便扱いときいてホッ。荷物はスルーで目的地までいくのは子供達に負担が少なくてすむ。エアーニュージーランドと J A L との共同運行機がこの路線だが、“世界一の安全”を誇った J A L 日本航空の信頼も経営も地に落ちたことは、映画「沈まぬ太陽」でも語られている。作家山崎豊子が世間に訴える社会事情などへの眼の確かさにはいつも驚かされる。映画「沈まぬ太陽」が封切られた時、私は 2 度も映画館へ足を運んだ。俳優渡辺謙が演じるサラリーマン恩地の信念を貫く生き方の迫真の演技もさることながら、ナイロビ、テヘラン、カラチというアフリカでくり広げられる壮大な自然と動物のシーンが私の心をとらえた。まだ地球にはあのような動物達の生息する場所が残されているんだという驚きと安心感が私をたて続けに同じ映画を見させたのだと思う。

機内では、通路をはさんだ私達の左横側一列にカズト、リュウマ、リョウヘイが。その後ろにはガイア、カズキ、ヒロト。私達の後ろはサツキ、アカネ。ほとんど空席なしの N Z 98 便は一路オークランドへ。

手荷物検査 ——

“イクスキューズ ミー”、オークランドから N Z 303 便への乗り継ぎの時、検査官から声をかけられたのはリュウマ。レッドカードだ！！何だろう？関空ではひっかからなかったのに？何故だろう？ホッカイロ 1 枚を手にした検査官が「これは火薬が入っている。火をふくおそれがあるから没収する。ここにサインを—」と。寒い時のために持たせた菊池ママの親心がわかる。「リュウマ、ありがと。先生もこれに火薬が入っているからなんて気がつかなかったわ、これからの参考になるわ、ホッカイロはスーツケースの中に入れましょうって」緊張していたリュウマの表情がいつものかわいい笑顔に戻った。

3 月 22 日(日) —— クライストチャーチ到着

303 便では座席が変わり私達の窓側にはリョウヘイ、おでこをくっつけ眼下の景色に見入っている。「リョウ、ビルディングはひとつもみえないでしょう？緑ばかりで・・・」「はい、そうですね。」反対側の窓側のヒロトの顔色が冴えないので気がかり。でも現地時間 8 時 20 分着は日本時間 4 時 20 分だもの、みんな眠そうなのはあたり前。

税関 ——

税関検査は“食べ物持ち込み”のレッドラインに並び、先頭にリエ先生、生徒 8 人、その最後に私。フルーツは？肉製品は？植物は？と聞かれているが“N o”で全員無事通過。メスベンからのキウイのバスドライバーが待っていた。

「みんなあ〜」リエ先生が生徒達に声をかける。「ここから 1 時間半ぐらいだって、トイレに行っておこうね！！」やっとな彼女の顔に血色が戻ってきた。福井から関空までのバスの中でも機内でも“眠り姫”のようにダウンしていた。原因は食べ物、出発前日に東京で友人の結婚式に参列。その時の披露宴のごちそうにアレルギー反応のある山芋が入っていたらしい。私は 9 人の生徒のこれからの 16 日間に思いを新たにする。

子供達の健康はまず食べることに。でもひとつまちがうと食べ物は身体のエネルギーを奪う毒にも変わる。お腹をこわしませんように。

メスベン

5年ぶりに戻ってきたクライストチャーチは、空港の近くが工事中であることを除いては何も変わっていない。牛や羊や鹿がのんびりと緑の草原に草を食い群れている牧歌的なシーン。マウントハットリゾート地に着いた頃、バスのフロントガラスに小雨がばらつき始めた。「ニュージーランドへ来て傘をさしたことはないのに一ことは雨なのかしら？」私はリエ先生に同意を求める「晴れて欲しいわ。」第1日目の宿泊場所はベイカーズロッジ。トニイというロッジオーナーがどっしりと厚いからだで固い手で“Nice to meet you.”と握手を求めてきて、研修の第1日目は幕を上げた。



シープドッグ

「リエ先生、これで全員分です！」「さすがヒロト、もう集めてくれたの？」パスポート8冊をリエ先生に渡すと、ヒロトはロッジの自分達の仲間のいるところへダッシュした。

「できるだけ子供達の自主性を重んじたい」というリエは、みんなに役割分担を決め、早速実行に移している。

ニュージーランドの人口の10倍以上いるとかいわれる羊は、シープドッグによってコントロールされている。“御主人様”と絶対服従するファームのマスターの笛ひとつで、シープドッグは巨大な数の羊をいとも整然と静かに移動させる。そのシーンを初めてファームステイをして見た時、感動の余り叫んだものだった。「日本の学校にもシープドッグがいたらねえ！！」。その頃の中学校の先生方はワイルドな生徒達の反抗や攻撃に手をやいていた。すぐれたシープドッグは、ワンワン、キャンキャンとは吠えない。群れをリードするのだ。リエ先生というマスター役の下で、今回9人の生徒達のそれぞれがシープドッグ役をして欲しいと思う。

英語カスタート

中学男子3人、小学男子3人、小学女子2人が与えられたロッジの部屋に荷物を入れ、わらいさざめき始めた。

「カメラをさっきのバスの中においてきてしまいました」とカズキ。「ロッジのマスターにきいてみたら？」「どうしたらいいかな？どこにいるんですか？」「ルーム16で仕事をしているってさっき言っていたから、いるとおもうよ。」「なんて言えばいいんですか？」「アイ レフト ビハインド マイカメラ イン ナ バス。」「よっしゃ、行こう！！」カズキとガイア、ヒロトが英文センテンスをくり返しつつ、ルーム16へ走る。

夕食のバーベキュー（BBQ）までには3人は戻っていた。

「めっちゃ迷ったなァ」「おれたち、言われたとおりに行ったのはいいけど、戻ってくるのにめっちゃ苦労した」「でもそれってすごいじゃない、ちゃんと英語で分かったんだし、戻ってこれたし・・・。」

テーブルの上にふんだんに並べられた焼きあがったビーフ、パン、フルーツ、ジュース、牛乳などに、疲れを知らない子供達の食欲が再スタートした。

ラッキーユー

「人口1400人のこのメスベンは7、8、9月には5～6倍のスキー客で賑わうんだよ。食事も長蛇の列になりまるで競争だよ。こんなオフシーズンでのんびりなんてラッキーユー」オーナーのトニイが言うように、ロッジには私達10人しか客はいない。本当にラッキーだと思う。生徒達が長旅の疲れのままホストファミリーに直行するよりも、お互いに仲良くなれるロッジスティの案は良かった。

翌朝7時30分、アカネとサツキが言う「先生、中学生の部屋は返事がないんです。」カウント係りの2人は「ワイアー レディ トゥ カウント」とはりきったのに、早くも3人不足。その時私の脳裏に田辺ママのひとことがよみがえってきた。「あの子は朝に弱いんです。」私は食堂を抜け出し中学生3人の部屋のドアをたたく「ドーン、ドーン、ドーン」。泊り客がないことを知ってのことだが完全なマナー違反。応答なし。又「ドーン、ドーン、ドーン」やっとドアが開けられた。3人はバクスイしていたという。「早くしないと朝ごはんもうないかもよ～」という私の脅しにビクともせず悠長に食堂に現れた。トースト、シリアル、フルーツなどのビュッフェスタイルの朝食のあとで、私のためにトニイがいてくれたフレッシュコーヒの分け前にもありつけた。本当にラッキーユー！！

3月23日(火)—— マウント・ハット・カレッジ

スキーリゾート地メスベンにあるマウント・ハット・カレッジは、生徒数500名余りの日本でいえば高校にあたる。「どうしてこの学校を知ったの？」という私の問いに「スキーヤー



の友人を通してスキーリゾート地メスベンを知りこの学校につながったの」という。結婚適齢期に連続国体出場している彼女は、シーズンになると大忙し。“挑むものがあるのは幸せ”と本人はいつも満たされているが、親の私にすれば“結婚に挑んでほしい”とつい思ってしまう。

ベイカーズロッジから車で5分もしないうちに学校に着いた。講堂前3分の1ぐらいに生徒がすでに座っている。ESOL担当者らしい人が手招きで私達を呼ん

でいる。英語がわかるように“バディ”をつけてくれたらしい。

バディをハローの生徒の横に1人ずつ座らせている。

「リエ先生、私はステージに上がってあいさつするのかな？」「しなくていいんじゃない？」

「生徒達の紹介は？」「なさそうね・・・」「エッ！何の紹介もなくてそのままで勉強？」「・・・

そのようよ」「いきなりそのようなことありえん」私は不満をブツブツとリエ先生に語る。

「学校長も責任者も顔を出さないなんて、ほんと田舎ね、この学校って・・・。」

これまでのクライストチャーチでの儀式はこうだった。クイーンズ・パーク・スクールの全生徒、全教師、PTA役員が講堂に集まってハローの生徒を迎える。校歌斉唱、ディック・コンリイ校長のウェルカムスピーチ、引率者のサンキュースピーチ、生徒達の紹介、学校への贈り物を生徒代表が手渡す。その儀式によってハローの生徒達が学校での“市民権”を得て自由な交流が始まった。それなのに・・・。

「今年はこの学校初めてなんだから、お母さんの目でいろいろ見てさ、今後の方針を決めればいいんじゃない？」リエ先生は冷静だ。

「生徒のことは私が教室でもアクティビティでも見ているから、お母さんは学校側と交渉し

たら？」笑顔のまま生徒達とE S O Lの教室の方へ歩いていった。「そうか、私が交渉人・・・」ひとりつぶやきながら全員のパスポートが入った袋を手に反対方向に歩き出した。別棟のOfficeと書かれた部屋で忙しそうに事務員がコンピューターにむかっていた。まずは安全な場所にパスポートを保管してもらおう。「イクスキューズ ミー」、私のあいさつに体格のよいグラマラスなその女性はコンピューターにむかったまま「イエース？」と答えた。“交渉人”の第一日目はこの会話からスタートした。

ホストファミリー ―――

見知らぬ生徒に1日3回の食事と寝る場所と安全を与えてくれるだけでなく、その家庭の一員として扱ってくれるのがホストファミリー。自分の家を開放してくれる心がまえと寛容さがなければ、なかなかひきうけられないことだ。日本でも留学担当者の頭痛のタネは、たったひとりやふたりの留学生のホストファミリーが見つからないことにある。

今回は1人の生徒に1つのホストファミリー（シングル プレイスメント）をと、これだけは譲れないリクエストだと何度もメールを交わした。9人の生徒にシングルプレイスメントがあれば、引率者の2人はどこだってOKと譲歩もしていた。

9人分のホストファミリーとその家族構成が送られてきたのは、出発前のオリエンテーション間近だった。「期待できるかも」と思えたのは、ハローの生徒の年齢に近いホストブラザー、ホストシスターがいることだった。それでも祈る気持ちは変わらない。「どうか2週間ハローの生徒の面倒をよくみってくれるホスト達でありますように。」

ホストファミリーのありようも、質もこの20年間で大きく変わった。政治・経済の変化を見る時、当然のことではあるが残念なこともアメリカ・カナダで多く見てきた。変えたのはホームステイをビジネスととらえて、何の信念も相手国の国やホストファミリーへの配慮もなく、ただ生徒を異国に送り出すだけの業者や会社だったと私は思う。異国で糸の切れた風のような自由とおこずかいを手にした生徒達は、ホストファミリーをただ使いしてしまった。生徒が悪いのではなく、生徒目線でモノを見、考え、教育する滞在引率者が少ないことが良質のホストファミリーが消えていく原因を作ってしまった。

過去のハローのニュージーランドでは、例外なく生徒達がホストファミリーを「こっちの人って、ムッチャやさしいわ」「うちのホスト最高！！」「ホストと別れるのがつらい。」別れる日の生徒達の号泣や涙がホストの涙となり、交流は10年余り続いてきた。それがクイーンズ・パーク・スクールでのホームステイ継続の要因だった。さて、この田舎町メスベンはどうだろう？長時間の英語研修を終わり教室から出てきた生徒達がひとりずつホストファミリーにひきとられていく時、私は又もや神に祈った。どうかよいホストでありますように。

25日(木)――― リクを迎えにエアポートまで



3月25日木曜日、朝7時きっかりにロビンが私のホスト、クッレイ家の玄関に現れた。まだ外は足元に気をつけなければいけないほど暗く朝は来ていない。朝早いのはどれだけでも平気と自他共に認める私だが、コーヒー抜きはつらい。福井から持参したマイコーヒーが作れない。老夫婦のこの家ではコーヒーメーカーがない。

ロビンの車によじ登った私は再確認する。お金よし、書類よし、ゴルフシューズよし、ゴルフボール、手袋よし。きょうのアクティビティはゴルフと乗馬とアイテナリイ書いてある。その頃までには戻ってこられる。「キミエ、今からシャリーの家に向かうの、20分くらい。その後シャリーの車でリクを迎えに行ってね。」

シャリーの家はファーマーだった。彼女の車に乗りにかえて、私達はクライストチャーチ エアポートに向かう。

90 kmのドライブは、リクのホストファミリーを詳しく知るにはよい時間だった。肌のつや、腰周りの肉のつき方からみるとシャリーは40代前半の年かも。2男1女の母、「あのね 私はノースアイランドの出身なの。今は親達もアッシュバートンに移り住んでいるのでよく会っているわ。」「ノースアイランドの人がサウスアイランドのメスベンに住むようになったのはなぜ?」「実はね、私、マウント・ハット・カレッジで数学の教師をしていたのよ」「じゃあメスベンでファーマーのだんなさまと会ったの?」「そう、彼と出会ってから教師は辞めたの」「ファーマーってイクサイティングな職業でしょう?いろんな命とむきあって育てて・・・」「その通りよ、まぶしい!!朝のクライストチャーチ行きは大変なの、まぶしすぎて。」彼女はサングラスに手をのぼし時速100 kmをゆるめない。「シャリーあわてなくてもいいのよ、リクが出てくるまでには時間がかかるから。

まぶしすぎる中でも速度をゆるめない。心中思う、ここで交通事故にでもあったら他の生徒に迷惑がかかる。まだ始まったばかりのホームスティだもの。

クライストチャーチは東に位置する。フロントガラス右前方がオレンジ色の巨大な雲海におおわれている。空と地を光でつなげるかのような雲海。きっとリクは機内でこの雲を見下ろしていることだろう。

関空からオークランド乗り継ぎでクライストチャーチまでの一人旅。それを決意し実行しているのはリク、12歳。

「リクはねえ、スポーツ団のお別れ会にどうしても参加したいといっぴり一人旅になったの。後輩部員の親切に答えたいからって・・・」「グッドボーイ。」これから2週間、リクのホストマザーになる彼女。「パーキングする場所が見当たらないからぐるぐる回っているわ、10分おきにくるから。」

私は国際空港のアライバルANZ 303のボードを見る。“Landed”到着がフラッシュしている。まだまだ時間がかかるだろうと思ったのは誤算だった。リクがすぐに現れた。ANZのフライトアテンダントに付きそわれて元気そう。「リクくん」荷物を見てはっとする、“Priority”の赤いタグが、「リク、もしかしてビジネスクラスで来た?」「そうです。後ろの方に修学旅行のような生徒がたくさんいました。」エアーニュージーランドのビジネスクラスのサービスのよさは定評がある。「やったね、リク!!」リクがにこっと笑った。今回は自分の決意を曲げないで一人旅に挑んだリクに女神がほほえんだのだろう。リクが無事に着いたよろこびは現実に戻った。コーヒーを飲む間も与えずシャリーが又、猛スピードでメスベンに向かって車をとばし間にあった。学校ではハローの生徒達をロビンの運転で乗馬とゴルフに連れて行くところだった。

Officeで国際電話をかけさせてもらう。

リクはママの声を聞いてちょっとうるっときていた。リク、よかった!。

政權交代 ———

「お母さん、鏡を見たら?」リエ先生が苦笑する。シャリーの車の中で許しをもらってメイキャップをしたものの、あのスピードでは、まるで“福笑い”。

「ゴルフってねえ、楽しいけどひとつ間違ったら大事故につながるのよ。絶対打つ人の前に出ないこと、クラブを人がいるところで振らないこと。」ゴルフの時私は叫んだものだ。「あなたの頭がスイカやトマトになるのよ。」私の注



意にやさしいカズトがつぶやいた「表現がグロすぎる・・・」それでも言わないと生徒はわからない、初めての体験だもの。

ゴルフも乗馬も無事終了、何事もなく終わりホストファミリーに生徒達が戻った後、リエ先生と私は学校から歩いて帰路についた。とうとう歩けなくなった私「もう歩けなーーーい」

「私の靴をはいてみる？」「うん、貸してくれる？」。それでもパワーが出てこない。気がついてみれば朝ヌキ、昼少々。栄養失調と朝7時からのゴルフシューズがきつすぎるからか。

「おんぶしてあげようか？お母さん」「・・・」やっぱり足が痛くて歩けない。近くの店で電話をかけイレンに迎えにきてもらうことにした。「ありがとう、イレン、私もうギブアップ」イレンは「ノウ プロブレム」といつものように優しい肝ったま母さん。「夕飯までちょっと休むね」とリエ先生に伝えてベッドの上に足を投げ出す。「それがいいよ、私、タロウくんの部屋でブログを送ってくるね。」この家ではタロウの部屋からだけ日本語のブログを送ることができるらしいが私は見ていない。日本に帰ってからの楽しみにしよう。「ハローのお母さん方からもコメントがきているの。だから生徒にもね、日記や写真を出してもらっているの、その方が家族の人もうれしいでしょう」とリエ先生。オンタイムで我が子の海外でのようすや日記を知ることができるなんて・・・どんなにか家族の人は喜ぶことかしら。今までやったことのないブログ発信。とうとう“政権交代”の波が押し寄せてきたことを感じた。

3月26日(金) —— クライストチャーチ

ホームステイが観光ツアーと全く異なるのは、家族として現地の人々とどれだけとけこむかということである。それ故に引率者は滞在中、ホストファミリーと生徒双方の感じ方や不足に神経を使わなければならない。ホストファミリー全家族に「問題はありませんか？」と電話をかけたり、「ホストファミリーと話ができています？」などと確かめることをリエ先生と私でずっとしてきた。きのうまでは目立った問題は発生していない。といっても、小学生6人と中学2年生3人、どれだけ“よその国”の“よその家”でとまどい涙をのんでいるかは想像できる。だからこそーと思ってこの子達を連れてきたのだ。モノに溢れた何の不自由ない日本の暮らしは、日本人の心から大切なことを奪ってしまった。昨今の若い人達による目をおおような犯罪、残虐性をきわめた事件は人間のすることとは思えない。生まれた時から動植物と向き合っているニュージーランドの人達にはどのように映っているだろうか？恥ずかしくて恐ろしくて話題にもできないが。

この日の生徒達のアクティビティは、羊の毛刈りデモンストレーションとブッシュウォーク、ロビンとリエ先生が同行だから問題はない。プログラム最後の観光の下見と予約の仕事をすませなければ。クライストチャーチに行くことにした。メスベンから片道36ドル「バス代が36ドルなんて高すぎー」と思ったが、その思いはすぐに消えた。「助手席に来ない？」ウーマンドライバーが私に声をかけてくれた。「他に乗客がいないのよ。」「カンターベリィ平



野は、穀物、野菜の宝庫で、NZの人の暮らしを支える大きな収入源である。」「この川はトラウトが沢山とれるリカイアリバー。この橋は全長1.7km あって去年までは南半球一番の長さだったの」「あれは人参、これは・・・」長く続く一本道を運転しながらガイドは続く。「おいしいコーヒーをごちそうさせてくれる？」私の提案に「グッドアイデア！！」とすぐにのってきた。途中で車を止めテイクアウトのホットコーヒーを2つ手にしてきた。

クライストチャーチに近づくにつれて車の流れが多くなった。大聖堂前がバスの終点。広場をうめっている露天商、巨大チェス、人の行き来、トラムカー、5年前と同じなつかしい風景だった。

4月3日、4日に予定したクライストチャーチ観光の手配は、今回は私とリエとでしなければならない。予約の必要な所には今のうちにしておきたい。4月2日がグッドフライディ、日本のお正月のように店はクローズ。生徒達にはどれだけのことをし、できるだけいろいろ

な所へ連れて行ってやりたい。私はまずホテルに向かう。ザ ヘリテージ ホテルは、インターネットでリエが日本から予約してあったが確認しておこう。ホームスティではとても泊ることのできない超高級ホテルだ。3つの部屋が予約できていたのは、「特別プラン」をみつけたことにあった。大聖堂に面しているホテルだから小中学生も迷うこともないし、ショッピングもどこへでもアクセスできるというねらいはうなずけた。「これで3日、4日の観光はOK。生徒達にとって初めての街クライストチャーチはどんなふうに見えるだろうか?」。予定していた仕事が全部終わった時、私はタクシーを拾った。あの場所へ行きたい—あの場所シャトー オン ザ パークへ。

ハグリーパーク近くのこじんまりしたそのホテルのレストランが好きだった。いつも美しい花で旅人を迎えてくれる庭付きレストラン。人の記憶は視覚・聴覚を通して人の心に刻みこまれるものだが、味覚も大切な役割を果たす。「ホワイトワイン」と言って、私はリストの中から「オイスターズベイ」を注文した。よく冷えたオイスターズベイを口にした時、初めてここで会食した男性を思い出していた。ディック・コンリィ クイーンズ・パーク・スクール元校長。2年前68歳で急逝したその校長が「ハロー ニュージールランド・ホームスティ」の原点だった。

さまざまな思いが交差する中でクライストチャーチの黄昏は夜にかわっていった。

3月29日(月) —— 交渉人

「ニュージーランドには一日のうちに四季あるんですね」と言ったら、メスベンの方は「ここでは6つぐらいあるよ」と笑って答えたが、ほんとうに寒暖の差は激しかった。現地学校の生徒も制服の赤いセーターを着ている子、半そで半ズボンの子とまちまちだった。ハローの生徒といえば、おしゃれな女の子2人を除いては、「ひょっとして着のみ着のまま?」と思うくらいに黒のジャンパーが目立っていた。



どんよりとした週末が終わり、快晴の月曜日が訪れた。今日のアクティビティは、ジェットボートとなっている。「見て、これ」リエ先生が珍しく声を荒げた。Week2のアイテナリをみると、ジェットボートは2:10~3:00となっている。「生徒達が楽しみにしているジェットボートが、出入りいれて40分なんて、正味30分もないと思うー」「金曜日にクリスに言ってみた?」「だめだったわ・・・。」私の出番がきたと思った。

オフィスへ行き、副校長のクリスとの面談アポをとり、その時が来るまでいろいろシュミレーションをして待った。「今回はすべて生徒のためだから一おとなしく下手にしたほうがいいのでは?」「でも、意見がぶつかってもとことんやるべきでは?・・・。」

「グッドモーニング」初対面のクリス・カンハムは笑顔で迎えてくれたが、彼女自身も数学を教えているということで、次の授業までと時間制限をまずされてしまった。「急な変更にもかかわらず、すばらしいホストファミリーと英語研修を予定してくださってありがとうございます」と礼をのべた。クリスが言う「ホームシックにかかるのをさけるために2人が1つの家庭にというのが、我校のこれまでの方針でした。ハローインスティテュートの生徒は、1人が1家庭を要求して来ましたね。週末ホームシックにかかった生徒もいてホストが困った

と報告を受けています。だから2人が1家庭の方がいいんです。」ここで同意するわけにはいかない。「クリス、年端もいかないヤングキッズがホームシックにかかるのは仕方のないことです。でもその体験が後に大きな心の成長になるものです。ホストの人にはお会いしたら、私の方からもお礼とお詫びを伝えます。」

ところで一と本題に入った。「あまりにも郊外学習の時間が短かすぎます。たとえば、ホースライディングやゴルフ、今までなら1時間の乗馬、18ホールラウンドのゴルフができましたが今回は——」「わかりました。次回あなたが我校を選んで再びホームステイプログラムをくむ時には、今の意見を尊重しましょう。」ちょっと待ってね——と私は思った。9人の生徒達の顔が脳裏をよぎる。乗馬の時もゴルフの時も不完全燃焼のまま終わったっけ。この子供達にとっては、これが初めてで最後のニュージーランド ホームステイになるかもしれないのに。送金したプログラムフィはどこでどんなに使われるの？とも思ったが、やはりエレガントにいかなくては・・・。

「ニュージーの人には、おわかりにくいかもしれませんが、この美しい大自然の中で、輝く太陽の下で、生徒達が共通なアクティビティをすることは日本ではできないことです。きょうのジェットボートの予約時間を延ばすことができないのであればそのままでもOKですが、とにかく大自然の中へ早めに出してくださいませんか？たとえば3月31日の——」「？」「スポーツディも屋内ではなく屋外でやってもらえませんか？ゴルフとか乗馬とか」「アクティビティ コーディネーターのロビンにきいてから返事します」とクリスは言うクリスに私は言った。「先週あなたが不在の時にこのことを伝えたが、クリス、あなたが責任者といってきたではもらえなかったんです。」そして「出発前に日本からも何度もあなたに電話を入れたが、いつも不在か繋がらなかった。お忙しいことはよくわかるけど、今からでも遅くないチェンジもあるはずだからお願いします。」

さらにクライストチャーチ観光についても私は新たな提案に出た「私達日本人だけ行くよりは、ホストの子とかバディとかも一緒に行くようにしたらどんなに楽しいことでしょう！」。次第にクリスの表情が明るくなった「そうですね、我校にはツアーリズム（観光業）のコースを勉強している生徒達もいるから一緒に行けばその子たちの勉強にも役立つでしょうね。」

それから先はほとんど前向きの話しになった。アカロアヘドルフィンを見に行くことも、エイボンリバーでカヌーをすることも、キウィ生徒達も同行する。キウィの生徒達が日本へくることがあれば福井にも立ち寄ってもらいたい。ゆくゆくはメスベン発福井行きのツアーがあってほしいなどと。クリスと私は近い将来そうなることを誓って分かれた。すがすがしい気持ちだった。



早速リエ先生に報告のために教室に向かう。彼女は生徒からの日記に赤ペンでコメントを書いている最中だった。「うまくいったのよ！！とりあえずきょうの午後のESOL4のレッスンは、なし。ジェットボートに出かけるの」「さすがキミ先生！！」顔が輝いた。生徒達と密着同行しているうちに、すっかり生徒の気持ちをつかんだリエのほうが私よりずっと嬉しそうだった。

交渉人は大きな役目が終わってほっとしたのもつかのま、ジェ

ットボートで生徒達の“ワンモア スピン プリーズ”につきあって、水をざんぶりがぶった上に目が回ってしまった。

3月31日(水) —— 変化

汗ばむような快晴の日が続いた、有り難い天候だ。スポーツ、タウンシップへ買い物、屋外プールでの水泳など、“交渉人”の依頼どおり時間をたくさん設けてもらった意味があった。生徒達は輝くような笑顔とじゃれあいと競争の中で、次第に個性を現していく。教室での学習だけでは測ることのできない何かがパッと光るのを見つけるこの発見のよろこびは、幼稚園の保育士、スポーツのコーチや学校の教師など、人と接しモノを教え、はぐくんでいくものに与えられた醍醐味だと思う。でも残念なことに日本の教師は発見の喜びの前に、面倒なことにもかかわらなければいけない。クラス人数が多すぎる、モンスターペアレンツの出現、学び舎以外での生徒指導などなど。登校拒否は生徒側だけでなく、教える立場の者にも多く発生していることをマスコミは伝えている。「かわいそうな先生達!!」と私は同情する。ヤングティーチャー達がこの広い大自然のニュージーランドに来たら心が変わるのではないかと思う。「そんな悩みなんて、小っちゃい、小っちゃい」と。

生徒の心の変化と同様、私の心の中でも何かが変わっていった。初めてマウント ハット カレッジでとまどい不満をぶちまけたことは、ただ“過去の比較”から生じたことに気がついた。校長も副校長も女性。素朴でとてもいい人達だ。無愛想にみえた事務員ともすっかり仲よしになり「FAX? Copy?」と私の顔を見ると問いかけてくる。この学校しかできないことも私の心をとらえた。ハローの生徒達には相応の年齢の現地生徒の授業に入れてもらえたこと。かしこいバディが言葉のギャップをうめてくれること。ホストファミリーがほとんどファーマーであること。今までにない新しい体験の場が与えられたのだ。アグレッシブに文句をならべた自分を反省した。

「生徒達はどうだい?問題はないかい?」大黒様に似た福顔のドンが“午後のビール”を飲みながらたずねる。「生徒たちがかわっていくの、どんどん」「ほお?」「ホストファミリーが親切なので、自信がついたことが彼らをかえていっていると思う」イレンがそばで言う。「それはよかったね、キミ」「バット アイブ ロスト マイ ジョブ」とかえすと、2人はワアハッハッと大きく笑った。羊のシーラーとして47年間働いた夫とレストランやお店でコックとして勤めてきた妻は、二男一女にも恵まれ、3人とも世帯をもち孫もできた。去年金婚式だったという。人生の残りはもうあくせくしないで、留学生のお世話ときめこんで、カレッジから依頼されるとひきうけているという。今は北海道出身のモモタロウという17歳の高校生がロングステイしているが、夫婦は「タロウ、タロウ」とかわいがっている。



留学生といえば、ハローからもこのニュージーランドへ来て高校を卒業し、日本の大学にはいった生徒も数人いる。彼女達は、自分の立つ場所も行く道も見えないこともあった。でもニュージーランドの豊かな自然とキウィの素朴な優しさと朴訥(ぼくとつ)さの中で何かをつかみ、自分の道を歩き出すことができたのだと思う。十代の子供の心はやわらかい。それ故に傷ついたり悩んだりするが、収穫することも大きい。今回の9人の生徒の変化に目をみはり、この先が楽しみになってきた。リエ先生は野阪智子ちゃんに電話をかけている。メスベン近くのアッシュバートンで学んでいる高校留学生トモコは福井にいる時に探せなかった学ぶ目的をしっかりとつかんできた生徒のひとりになっていた。

4月2日(金) —— グッドフライディ

昨日の終業式を区切りに学校は2週間のロンバケに入った。ハローの生徒達は各ホストのフ



ファミリープランに従って1日を過ごす。我家ではBBQが予定されている。天気予報では、きょうは26℃～27℃になるらしい。ビーチやレイクに行く家庭もありそうだ。

「ひさしぶり～！！朝が遅くていいなんて！！」

「お散歩しようか？」リエ先生と私はもう太陽が昇ったメスベンいつもの道を歩きだした。こじんまりした街はすぐに中心部のタウンシップにたどりつく。「リンリン、きのうはやっぴりさすがリンリンと感心したわ」「ウエルカムパーティ？」「生徒達に全部やらせて、生徒もすっかりのりのりだったし」「そうね、けっこうホストもバディも喜んで、参加型パーティだったね。」ふつうは現地の人々がMC(進行係)をつとめるのだが、カズトがそれをやりとげた。アカネとサツキの英語で言うなぞなぞクイズもしっかり会場の人に伝わり、正解者は日本のお菓子のごほうびをもらって歓声をあげていた。空手や宝さがしも大いにうけた。

私達はとにかく昨日まで何のアクシデントもハプニングもなかったことに安心した。「BBQのワインでも買おうか？」日本でいえばコンビニのような小さなスーパーが開いていた。「残念でした・・・」とリエ先生がはり紙を目ざとく見つけて言う“本日はグッドフライディにつき、アルコールの販売はできません”と書いてある。「ほんとだ、ザ・ン・ネ・ン。」この国がアルコールには厳しい国であることは、何日か前に入ったカフェでも知った。その日は酒類販売の免許を持った人が早退したので、ビールなどアルコール類は売れませんとレジの人が言っていた。自動販売機でアルコール類が売られている節操のない日本とは大ちがい。

私は絵葉書を5枚求めた。きょう書いて明日クライストチャーチで投函すれば、10日ごろには東京に着くだろうか？どうしても出してお礼をいいたい人がいる。グッドフライディが宗教的な休日で天国にいった人達の御霊を想う日であるならば、私は一年前を回想して、なんという巡りあわせだろうかと思った。去年のこの日、私は南青山葬儀場で、息子と最後の別れをした。絶望と悲しみで何も見えず何も聞こえず、すべてが悪夢であってほしいと願った。人はすべてを失った時、本当の光が見えてくることをあとで私は身をもって知った。その光とは悲しみを共有できる人の心の優しさだった。多くの人に悲しみと絶望の淵から救ってもらった私達残された者。作家の伊集院静氏とレッドソックスの松井秀喜選手は、一周忌の息子を偲び、家族をねぎらって、桜やボケの花が届いていると夫が知らせてきた。伊集院静氏の懐の大きさと優しさはとぎれることなく続いていることに深い感銘をうけている。



「ただ今」、明るい太陽をいっぱいを受けて庭のバラ、トマト、ズッキーニ、ほうれん草が色つやよく光っている我が家に戻った。イレンはBBQのソーセージ、サラダ、フルーツポンチ、パン、デザートなどを大皿に彩りよく用意してある。さすが元コック！！。「あのねえイレ」「なあに？」「あそこのお店で私は仏教徒だからいいでしょう？ニュージーランドのワインの消費者になりたいって言ったのに・・・売ってもらえなかったの。」イレンはドンを呼び私の台詞をくり返し2人は身体中で笑った。そのうえ彼女は電話帳をとり出して電話をかけて

いる。「どこへかけたの?」「ホテルへよ」「?」「日本からの特別なお客だから、ワインデリバリーしてと言ったけど」「それで?」「5時まで待ってくださいだって」「ワット ア シェイム!!」私達は又、涙の出るほど笑いころげた。

午後遅くビーチ帰りだといって、ヒロトのモンゴメリ家とアカネのジェームス家がBBQに参加した。お腹いっぱいになった子供達にドンはゲートボールのようなゲームを持ってきた。リエ先生も私も子供になって、キウィ対日本の対抗試合。モンゴメリ家のスコットとエマのボールさばきのうまさはハンパじゃない。それもそのはず2人ともホッケー代表選手らしい。アカネもヒロトもなかなかいい線いった。「キミ先生ったら、ひとりでルール作って遊んでるし・・・」とアカネが笑う。モンゴメリ家とジェームス家がとても親しく感じられる。グッドフライディだった。

4月3日(土) —— 政治家と教育者

学校の駐車場には朝早いのに副校長のクリスも来ていた。見送りのホスト達はみんな別れを惜しみ再会を望んでくれた。中でもリュウマのホストマザーは目を真っ赤に泣きはらしていた。イレンと私は何度も抱き合って涙の別れになった。ドンとタロウにはリエ先生と二人で手紙を置いてきた。

人生は出会いというが、生徒達も心おだやかでやさしい人達にこのメスベンで出会ったのだ。メスベンからクライストチャーチに入り、最後まで天候に恵まれた。ゴンドラ、南極センター、雪上車、ペンギンバス、エイボン川でのカヌー遊び。太陽が暑いくらいに輝いていた。初秋のエイボン川には木々の色が映り、敵を知らない鳥たちが平和な水遊びをしている。そんな中で子供達の歓声が聞こえる。

夕方はテーブルマナーのディナー。

市内屈指の高級ホテル「クラウンプラザ」にあるレストラン。カシミアヒルズに住むイーワン・マーニィ夫妻とトモコに生徒の英会話のヘルプに来てもらった。イーワン・マーニィ夫妻とは1993年に来福した際、私が通訳業務をしたことが縁で家族ぐるみの交流が続いている。



「ひでえいいホテルやあ〜」「外人ばかり」「アピタイザー?なにそれって」「ベネソンって?ラムってどんな味やろう?」「おまえ、ビーフにするか?デザートは?」英文だけのコースメニューの説明は続くが福井弁がとびかう。

広いダイニングの前方はラウンジとなり、ピアノ演奏が聞こえてきた。ふと私は何年か前にこのホテルで当時の首相ジェニー・シップリーに偶然に出会ったことを思い出していた。



1998年か1999年だったろうか、ニュージーランド初の女首相は、私達がホームステイをしている時、歓迎メッセージを贈ってくれた。“ようこそニュージーランドへ。福井からホームステイの生徒さんがのべ100名も我国へ来てくれたことは記念すべきことです”。今は亡きディック校長のいきなはからいだったが、政治家と教育者の距離の近いことに驚き羨ましく思った。クライストチャーチ市の女市長ビッキー・バックも長くその座にいたが、当時子育

てに忙しいママさん市長と生徒代表達を会わせてくれたのも彼だった。生徒達はシティホールへ表敬訪問をし、ビッキー・バックと親しく話すことができた。当時中学生だった平井君が「市長の椅子もなかなかいいなあ」というのを聞いてビッキーは「あなたは医者志望ですって？医者の方がいいわよ、医者はパーマネットジョブ」とほほえんでいた。ニュージーランドでは学校長にいろいろな決定権や運営権が与えられていた。

1993年の11月、クイーンズパークスクール校長室でディック校長は「ミセス オオタニ、わかりました。教育も速いスピードで変わっていきます。子供達に異文化交流は大切です。我校は福井からの生徒を全面的にサポートします。是非連れてきてください。」当時まだ40歳台の熱い私のおもいを受けとめて即決してくれた。彼のおかげで、福井とクライストチャーチのかけ橋を生徒達が築くことができた。市長や首相さえも身近にかんじられた国ニュージーランド。日本も政治と教育が、政治家と教育者がもっと近くなってほしいと願う。自国の首相のことを誇りを持って語れないのは、海外へ来て残念に思う。

「先生のはビーフか？」生徒が私のメインディッシュをのぞく。「食べてみる？」「うん！！」。かくして私のビーフの半分以上は食欲旺盛な男の子達の胃袋へ。子供達の幸せそうな顔が嬉しい夜だった。支払いをしている私にリエ先生とトモコが近づいて言う「生徒達はホテルの室内プールで泳ぎたいって。私達が面倒をみるからキミ先生はイーワン達とゆっくりしたら？」「ありがとう、そうするね。」

再会 ——

子供達が視野から消えた時2人は私のそばに来た「よく帰ってきた私達の所へ・・・ずっと気になっていたんだが言葉のかけようがなかった・・・」「マイジャパニーズシスター」一看護婦をまだ続けているというマーニィが言う。「癌という病はね、いい人ほど早く連れて行ってしまうものなの。ディックも、私の妹も、そしてあなたの息子さえも・・・。」息子という言葉聞いたとたん、心のタガがストンとはずれた思いがした。メスベンでは誰に聞かれても「私の子どもは3人。息子1人娘2人」と答えていた。初対面の人にまで悲しみを語ることはできなかった。およそ母親となった女性にとって息子というものは、希望であり、生き甲斐であり、時には命そのものだったりする。それ故にその息子に先立たれた苦しみは、同じ境遇に立った人間にしかわからない、言葉では表現できないものがある。息子という言葉がいろいろな思いを伴って、私の頬をぬらす涙になった。「アー ユー オーケー？」「僕達はいつもキミのそばにいるから・・・」と慰めてくれようとする2人に「もう大丈夫なの、彼は私のところに帰ってきたのよ」と不思議な体験を話した。

去年の3月29日。その日曜日の東京は雲ひとつなく晴れわたり、青い空が頭上に広がっていた。病室でリエは「お兄ちゃん、最後までカッコいい！！」と息をひきとった後も手を握っていた。職場復帰だけを願いながらこの世を去らなければならなかった息子の寝顔は若くつややかで、今にも声をかけてくれそうにさえ思え、よけい切なかった。

「あれ？」「何だろう？バルーン？」リエと私は窓の遠くに物体を見つけた。その物体は息子の1261号室の部屋の近くまできた。「あっ、飛行船だぁ！！。」

私はとっさに息子が徳島から福井へ送ってくれた番組のことを思い出した。

“NHK四国スペシャル 吉野川飛行船の旅”。

「僕は晴れ男だからね、あの日の撮影は成功したよ」嬉しそうに語っていた在りし日の息子。ナレーションもカメラワークも構成もとてもよく、私の好きな番組のひとつになった。

近づいてきたその飛行船は1261号室でぐるりと向



きを変えてUターンをして再び青い空の彼方へ消えて行った。

「マーニィ、ディレクターとしての彼はあの飛行船に乗って大好きな仕事仲間のところへ行ったんだと思うの、やりかけた仕事をしにね。でもマイサンとしての彼は私の所へもどってきたの、ほらいつも一緒にいてくれるわ」私はバッグから1枚のバースディカードをとりだして2人にみせた。

お誕生日 おめでとうございます。

どうかこれまでの素晴らしい人生に

大きな誇りをもって、胸を張って、

これからの人生を歩き続けて下さい。

いつも一緒に傍にいます。

苦しい時も楽しい時も……。 実

平成18年7月2日

マーニィは声をあげて泣き出した。「あなたの息子は大好きなママのことが気がかりだったのよ、きっと」イーワンも涙をぬぐっている。「もう私は泣かないわ、あの子に又会う日まで誇りを持って生きていかなければいけないから。」

その夜のヘリティジホテルの私達女性の部屋はスイートルーム。2階の2つのゆったりとしたベッドルームには、アカネ、サツキ、リエ先生、トモコが。私は1階の大きな部屋にエクストラベッドを頼もうと思っているうちにそのままカウチの上で寝てしまった。夜中に寒さで眼が覚めた時、母親の私に戻っていた「女の子達4人は大丈夫かしら？」2階へあがってみるとみんなすやすやと寝ていた。私はもう1枚バスローブを着こんでカウチの上で眠りの続きに入った。

4月4日(火)——— ゴッドメイド

ニュージーランドを初めて訪れた生徒達にこの国はどのように映ったろうか？数えきれないほどの旅をニュージーランドで重ねている私にとって、今回は特別なものがあつた。中学2年の男子3人の言動は私の息子大谷実のその時代を思い出させた。いやいや無理に行かせられたアメリカでのホームステイは中学2年の男の子の心をとらえ、生き方まで変えた。おまけに母親の私にまでライフワークを与えた。「生徒さんに感動を与える仕事をお母さんもするべき。」その数年後彼は就職して海外ロケのたびに「ハローのみなさまへ」と番組紹介を欠かさなかった。

マンメイド・ゴッドメイドという言葉があるが、メスベンでラカイア川がはるか下に流れるパノラマビューに広がる山々や平野を見た時、まさにゴッドメイド、神が創りたもうた地と思った。

ゴードランド＝神々の地を知ったのは10年以上前。東京からNHK広島放送局に配属されたディレクターは、オペラ歌手佐藤しのぶさんと「世界・わが心の旅」の制作のため北欧を訪れることになる。

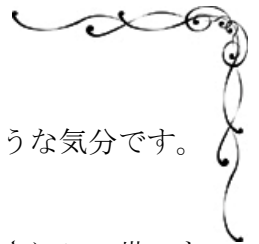
アイスランド上空をセスナ機で飛んでロケをしています。

氷河とか火山とか大草原とかプレートの大断層とか・・・

とにかく大自然がそのまま残っている国なので、自分が鳥になったような気分です。

中でも印象的だったのはゴードランド（神々の地）。

そこは氷河のすぐそばにある切り立った山々がそびえ立つ土地で、まさにこの世のものとは思えない光景です。



佐藤しのぶさんご夫妻も一緒にセスナ機に乗っていましたが、その光景を見て、しのぶさんは涙を流していました。（その様子は番組で流れると思いますが―）
とにかく筆舌に尽くしがたい壮絶なものでした。

NHK広島放送局ディレクター 大谷 実

その FAX がハローに送られて来て“是非是非一人でも多くの人に見ていただきたいと思います”と書いてあるのを見て、スタッフの人達、キタジマさん、マツウラさん達と 500 通以上のDMを出した。メール送信などない時代だった。

その3ヵ月後には、もうひとつの作品も放映された。“初めてのコンサートへ・佐藤しのぶとチェルノブイリの子供たち”。帰省した時に番組のことを話す息子の顔がよみがえる。「ウクライナのチェルノブイリ原発事故で被曝した子供達は甲状腺障害で苦しみ、サナトリウム療養をしているんだけどー。“子供達は見世物じゃない”ってカメラが入るのを断られてしまった。でもね、ノーモア・ヒロシマ・被爆の地の僕達の思いがわかってもらえたのかな、OK が出たんだ。僕はサナトリウムのその子供達の前でしのぶさんに歌をうたってほしいと頼んだんだけど、しのぶさんはステージもない、衣装も持ってきていない所で歌は歌えないっていうわけ。この先は僕個人の思いで言ったんだけど「サナトリウムのこの子供達はもしかして本物の歌など聴くことなく終わってしまうかもしれない。だから何もいらない、しのぶさんの歌声だけあればって頼んだ。」その番組の中でサナトリウムでの子供達のきれいな瞳が歌姫にくぎづけになったシーンは感動的だった。多くの反響をよぶ番組だった。



番組は佐藤しのぶのこの言葉から始まる。「私は神にもらったこの声を神に返すまでは歌い続けます・・・。」ところが去年、NHKの合同慰霊祭に上京した夫と私に上司の方が話してくださった「あの言葉は実くんが考えたものですよ。」ならば息子は神にもらったその命を神に返す日までをディレクターとして全速力で生き抜いたのかもしれない、と私は思った。

4月4日(日) —— 研修のしめくくり

研修のしめくくりはクライストチャーチ空港の待ち時間を使って行なわれた。



リエ先生はA4の裏紙を配布して言う。「だれが賞をゲットするのかしら？私がクイズを出すからこれに答えをかいでクダサ〜イ」「英語ですか？」「カタカナでもOKよ」まずね、これはみんな大丈夫と思うけど前置きをして「あなたのホスト家族全員の名前は？、ホームスティした土地の名は？」かくして真剣な9人は機内持ち込みバッグの上で、椅子の上で答えを書き出した。部門はクイズの部と日記の部、「日記はね、キミ先生に決めてもらうね。」リエ先生は

日々しっかりしていく生徒達の日記にコメントを書くうちに優劣つけにくくなったのかもしれない。「ガイア君とアカネちゃんが毎日しっかりかいていたけど、自分の気持とか反省を書いた意味ではアカネちゃんかしら？」私はリエ先生に同意しアカネに軍配をあげた。1

5問中13問正解のリクとガイア。リクはプレイオフを挑んできたが日記の部もあわせるとガイアが優勝、準優勝はリク。3人は記念のゴールドキウィの小さな置物を手にハイ、パチリ！！。

他のみんなに賞をあげたいな—私はひとり心の中でつぶやく。ムードメーカー賞にカズキ、お笑い賞にはリュウマ、行け行けドンドン賞にヒロト、心くばり賞にサツキ、やったで賞にはリョウヘイ。リエ先生だったらどんな評価になるかしら？生徒と行動を共にする時間が私よりずっと長かったから見方もちがってくるだろう。

おしなべて評価というものは数字で測れないところに意義があるものだ。ニュージーランドの大自然の中で動物や植物の命とむきあう人々の暮らしを家族としてすごすことのできたこの生徒達は、今、“種まき”をした。この種がやがて芽をふき、どんな花を咲かせるのかはまだまだ時間がかかる。大人はしんぼう強くそれらを見守り待たなければいけない。

「キミ先生からよ」と、リエ先生は賞をのがしている生徒にも元気づけて言う「みんなよくがんばったからごほうびだって」メスベンで買っておいたキウィバードのステッカー。数種の中からリエ先生が選び全員に同じものを買った。「これほしかったんやって！！」「よかったあスーツケースにはれるぞ」「おれのは借りモンやではられん、どこにはったらいいんやろ？」「ありがと先生」。クライストチャーチ空港に再び福井弁が飛びかった。

愛の力 ——

機上の人となって無事帰国できるという安堵感が私達を母と娘にもどした。「梨絵ちゃん、いい学校をみつめてくれてありがとう。この子達は恵まれていたねえ、学校にもホストにも天候にも」「ホント、週末は凍えるほど寒かったのにアクティビティのウィークディはいつも快晴だったね」「私ねえ、この子達が大きな力で守られているってずーっと感じていたの」「？？」「その力って、福井で無事を祈っているお家の人とかおじいちゃんおばあちゃんとかの愛の力だと今わかったの。」

生まれてから手塩にかけて育て、いつくしんできた我子、我孫が、一人でよその家族と暮らす驚きと心配。何かをつかんでくれればというかすかな期待。不安の中で後押しをしたのは愛だと思う。子供は少年、少女から青年、乙女となり、人を好きになり、やがては恋愛の遊びや辛さに身をおき、パートナーをみつける日がくる。おとなになった時、親が自分達のこととは後回しにしてでも、十代のうちにホームスティに行かせてくれた愛の深さを初めて知り、感謝するにちがいない。

私も又、大きな愛に支えられている自分を感じる。海外へ生徒を引率し、私自身もホームスティをするというカウンセラーをして20年以上の月日がたった。その20年のキャリアは、私が母から受けた無償の愛の長さになる。留守を守ってくれた母はこの世にはもういない。でも、出発の時のバスにいつまでも手をふっていた優しい母の姿が脳裏にやきついてはなれることはない。今年は夫がホームスティ出発バスの見送りをしてくれた。その姿がなんだか小さくさみしそうに見えた。



「お父さん、この頃すごくやさしくなったね」と梨絵、「ほんとにそうね。」今回のホームスティは生徒が9名に引率者2名、採算が合わないから私はやめとくといった時「金のことはいうな、生徒のためになることはしてやれ。お母さんも行った方がいいよ。」

夫は変わった。息子が中学生の頃、福井ではホームスティもカウンセラーの

ことも知られていなかった。「何のため子供3人もおいて、よその県の子をつれて外国へ行くんや!!」と夫は私が1ヶ月近く家をあける仕事を理解しようとはしなかった。「実くん、やっぱりダメ、お父さんは許してくれなかった・・・」という私に「女はだからプロになれるのや、すぐに言い訳をする!!、1ヶ月くらい外国で仕事をするのを許してくれんお父さんなら離婚してでも行くべきや!!。」

あの時の息子の後押しがなかったら、おそらく今の私はありえなかったと思う。“感動を与える仕事を”という言葉はやがて私のライフワークとなり、多くのすばらしい人達との出会いにつながった。夫は次第によき理解者となり、今では一番の協力者となっている。

今を生きる ——

「梨絵ちゃん、お母さんね、こんな日が来るとは思えなかったわ」「お兄ちゃんの望みだったからね、お母さんには仕事をしてほしいって。」兄と妹、時には親と子より強く心が結ばれる時がある。「お兄ちゃんが一番!!」と妹は9歳上の兄を尊敬し慕っていた。兄は一番の相談相手であり、的確な答えをくれる人であった。

兄に病が見つかった時「お母さんは仕事を続けていて、私が行くから」と東京をはなれ兄のもとへ走り、寄り添い、兄の生き方を理解した。病のことは誰にも極秘にし、ディレクターの仕事を続けるという兄を最後の瞬間まで守り続けた。

「お兄ちゃんは最期までカッコいい!!」と息をひきとった時発した梨絵の言葉の意味を、私は1年がかりでやっと知ることができた。

去年の3月、東京の病院に入院した息子の面会に行った夫は私に電話をしてくる。「リストラされちゃったよ」「??」「実がお父さんには用事がないって。あいつは、おかあさんならいいって言っていた。行ってやれ。」その時夫はすでに主治医から息子が重篤な状態であることを聞いていた。

かけつけた私は驚く。主治医と話す息子の顔が希望に満ちていて明るい。「先生、ぼくは今大事な仕事をかかえています。職場でミーティングや制作のあいまに飲む薬を調合して下さい。」病室に持ち込まれたパソコン、ノートの山、2台のケータイ。「お母さん、ぼくの仕事の邪魔をしないで」とクギをさされたが、親の感情などはさむ余地はない。

回診のたびに主治医にたづねる息子の声が聞こえる「先生、ぼくはいつ仕事に戻れるんですか?」「2、3日うちにもどれますよ。」その声が次第に聞こえなくなっていった時、私は激しく自分を責めた。私の育て方が悪かったのだ。幼いころから“男の子は強く優しいのが一番、責任感も大事”と言いすぎたことが、命を削る結果になったのだろうか。新聞やテレビが伝える事故や事件で子供を奪われた母親の気持ちがどんなに切なく哀れであるのか。そして自責の念で、生きていく意味さえ失うものであるのかが実感として身を襲う日々。

ところが息子は生きていた。病室で最期まで「大事な仕事」といっていたその作品“ONの時代”は、その後引き継がれて完成。放映された後で制作秘話を聞くことができた。「王・長嶋の2人の再会シーンを提案したのはオオタニ君でした。」「そのシーンで降っていた雨が撮影の時だけ止んだのはオオタニ君が合図をして止めてくれたんです。」「彼はずっとぼくたちと一緒にでしたし、これからも一緒に仕事をします。」

「ぼくは晴れ男だからネ」と言っていた彼は、やはり3月29日の晴れのあの日、飛行船にのって仕事仲間のところへ戻って行ったのだ。

いろいろな人達が彼のことを伝えてくれた。面前で。手紙で。追悼文で。電話で。遺された取材ノートの中にも走り書きがある。

“自然は残酷なまでに正直です”

“一流の人とは、業種や結果がすばらしいことではなく、生き方が一流の人をいいます”

“一番尊い生き方は、見返りを求めない愛”

彼はメディアの仕事を通して一流の人達に会うことができた。出会えたそのトップアスリート、文筆家、芸術家、文化人達には“今を生きる”輝きがあり、その輝きを番組として人々

の心の中に伝えようとする仕事で、彼も又“今”を一生懸命生きてきたのだ。
わかったことは、みんなの心の中で彼は生きているということだった。

感謝

「先生、パイオミア pioneer って「センクシャ、カイククシャ、先がけてする人って
かいてあります」電子辞書をのぞきこみながらカズキとガイアがいう。「ザッツ ライト！！
あなたたちは今までになかった最年少グループ、よくがんばったからネーミングにぴったり
よ。」関空からの飛行機ではゲームやテレビに夢中だった生徒達は、ホスト自慢、もらったお
土産のことや思い出話にかしましい。

オンタイムで映像も感想も日本に届き、日本からは親や家族からのコメントが入ってくる。
地球は狭くなった。20数年前には考えもしなかったことが現実となっていく時代。だから
こそと私は思う。世界を知り、違いを認め、自国を誇りに思うことがどれだけ大切か、国を
越えても、人は人によって楽しみも苦しみも共有できることを、この若い心が感じた時それ
は大きな第一歩となる。

「ことはねえ、アメリカにもパイオニアがう
まれたのよ」「？？」「1月にね、ボストンでカ
レン・ミミちゃんという大谷先生のはじめての
孫が生まれたの。きっとあなたたちの年になっ
たらアメリカと日本のかけはしになってくれそ
う。」今は娘の深雪が「この子はお兄ちゃんが授
けてくれた命」と育児にいそしんでいるが、カ
レンが国際交流ができるまで私も現役でいたい
と思う。



元気に1日1日をパワー全開でがんばった生徒
達から、私もまた元気をもらった。この生徒達
に、その御家族の人達に、今までカウンセラーを続けさせてくれた“卒業生”に。そして、
ホームスティの場所を与えつづけてくれる海外の人々にも、感謝の念でいっぱいになった。

完